

義務教育学校における小中交流に関する一考察

～5年, 6年, 7年生の交流活動を中心に～

石井久雄

1. 本研究の目的

(1) 研究の目的

これまで、筆者は、X学園の小学1年生と中学生との交流（お世話活動）に関して研究を行ってきた。そこでは、小学1年生をやさしく受け止める中学生の姿が浮き彫りになった。また、「小さい子とより深く関わっていこうという意識」や「自己充足感」等が高まっていくことを明らかにした⁽¹⁾。

しかし、X学園での小中交流は、小学1年生と中学生だけではない。小学5年生、6年生、中学1年生（以下、7年生とする）による交流も行われている。これは、小学1年生と中学生より年齢が近い交流であり、お世話活動とは異なる交流が行われていると考えられる。それは、どのような交流であり、どのような影響を及ぼすものなのであろうか。そこで、本稿では、X学園で行われている5年、6年、7年生による小中交流の実態を明らかにするとともに、その意義と課題を考察することにする。

(2) X学園の概要

X学園は、2006年に開学した大都市圏に位置する小中一貫教育校である。2016年に、義務教育学校となった。施設一体型の校舎で、1年生から9年生までが、一つ屋根の下で学校生活を送っている。9年間の学びを、1-4年生プロッ

義務教育学校における小中交流に関する一考察

ク、5-7年生ブロック、8-9年生ブロックの3つに分けている。5-7年生ブロックは、小学生と中学生の接続の部分であり、義務教育学校の要となる部分である。従って、5、6、7年生の交流は、とても重要なものであるといえよう⁽²⁾。

(3) FSS 活動の概要

5、6、7年生の交流活動のことを、X学園ではFSS活動と呼んでいる。2014年から始まり、現在4年目を迎える。今年度のFSS活動の目標は、「リーダーの育成とコミュニケーション能力の向上」である。5、6、7年生を縦割り班で、48のグループに分ける。一つのグループには、各学年2名程度、合計6名前後の児童生徒がいる。7年が班長で、6年が副班長となる。この班を中心に、FSS活動が行われていく。FSS集会では、各学年の学級委員から選ばれた学級委員長が、司会や運営を担当する。

2018年度の夏休み前の主な活動は、以下の通りである（表1）。

表1 2018年度のFSS活動の年間予定（前期）

日程	活動名、内容
4月12日	第1回FSS集会（FSSのグループ分け）
4月25日	結団式、交流の時間（リーダー決定等）、先生オリエンテーション（ゲーム等）
5月16日	第2回FSS集会、交流の時間（インディアンポーカー）
6月9日	運動会（FSS活動の一環として「台風の目」の競技に参加）
6月12日	体力測定交流（FSSの班ごとに体力測定）
7月11日	第3回FSS集会、交流の時間（ブックトーク）

出典：FSS活動の資料より筆者が作成

2. FSS 活動における小中交流の実態

(1) インタビュー調査の概要

X 学園の小中交流の実態を探るために、5 年生の学級担任である A 先生、6 年生の学級担任である B 先生、7 年生の学級担任である C 先生の 3 名にインタビュー調査を実施した。A 先生は、教員歴約 16 年の男性教員である。B 先生は、教員歴約 7 年の男性教員である。C 先生は、教員歴約 11 年の男性教員である。学校長と相談し、FSS 活動を熟知し、多様な角度から話すことができる 3 名を紹介してもらった。インタビュー調査の概要は、以下の通りである。

○日時：2018 年 7 月下旬の 2 日間

A 先生、B 先生、C 先生それぞれ約 1 時間程度インタビューを行った。

○場所：X 学園の教室

なお、インタビューの記述部分では、A 先生、B 先生、C 先生の発言は、A、B、C と表記し、インタビュアーは I と表記した。また、発言中の () の内容は、筆者が補足したものである。

(2) 設立の経緯

FSS 活動を始めたきっかけや背景は何だったのであろうか。開始した当時、5-7 年生ブロックのブロック長（責任者）をしていた、A 先生から設立の経緯を聞いたところ、3 つの点が明らかになった。

① 気の合うメンバー

一つめは、5-7 年生ブロックの担任の中で、「気の合うメンバー」が数名いた

ことである。それは、A先生の語りから何うことができる。

A：多分、このメンバーじゃないとやってないですね。面倒くさいですからね。はじめてやるし、本当に効果があるか分からないし、計画を立てないといけないし、提案しなければいけないし。面倒くさいけど、3-4人とも、なんかそういうのが好きだったという。

I：そういうのって、企画するのが好きとか、お祭りが好きとかって感じですか。

A：新しいもの好きなのかな、みんな。ちょっと良いなと思ったら、やってみようというタイプだったんですよ、全員が。

FSS活動をはじめたきっかけは、その当時、A先生を中心に数名の教員で話が盛り上がったことである。そのメンバーは、30代前半から40代前半までの教員である。駆け出しの20代の教員でもなく、ベテランの50代の教員でもなく、中間層の教員である。新しい企画を立ち上げるには莫大なエネルギーが必要だし、効果があるかどうか分からない。しかし、年齢の近い、気の合うメンバー同士で熱く語るなかで、「よし、やろう」と一歩を踏み出したのであろう。なお、推測にすぎないが、小学校籍の教員であるA先生がブロック長として、音頭をとっていったことが、この活動をスムーズに開始できた要因であったのではないかと感じている。

② X学園らしいこと

二つめは、5-7年生ブロックで新しい活動を始めるにあたって、「X学園らしさ」にこだわったことがあげられる。

A：で、3人で話していたときに、せっかくこの3人が一緒になったんだか

ら、「なんかX学園らしいことをやらない」っていうふうになって。「じゃX学園らしいことって何だろう」で言ったら、「それは、もう交流しかないよね」。6（年生）、7（年生）が一緒にいるって言うのは、まず無いので。

X学園は、公立の学校としては初めて施設一体型の小中一貫校として設立され、10年以上の実績がある。そうした歴史を振り返り、その強みを発揮しようというコンセプトにたどり着いた。これまでもX学園では、5-7年生ブロックでは、学校行事等を中心に交流活動は行われていた。それを、より頻繁に行うということが、FSS活動設立のコンセプトである。なかでも、6年生と7年生との定期的な交流というのは、施設一体型の義務教育学校（小中一貫校）でないと、あまり実施できない、貴重なものといえよう。

③ 5、6年生に見通しをもたせる

三つめに、「5、6年生に見通しをもたせる」ことである。5-7年生で交流活動をするというコンセプトが決まった上で、ひとまずの目標として、5、6年生が、7年生になった自分を想像できるようにすることに決まった。

A：じゃ7年8年になったときに、やりやすいような活動をしていたら良いんじゃないかというのがあって。じゃ、6年の時に、7年生と交流しておけば、何となく7年になったら、こういう風になるんだろう、こういう風にやれば良いんだろうと、5、6年生が見通しをもてるから、そういう活動を入れておこうねっていうのを〈中略〉話しながら決めました。

このように、5、6年生が、7年生になった時の生活を見通すことができることを、具体的な目標として、FSS活動が始まっていった。

(3) 5年生の変化

FSS活動が始まることで、5年生には、どのような変化がみられるのであろうか。2つの点を挙げておく。

① 中学校的な生活に慣れさせる

一つめは、「中学校的な生活に慣れさせる」役割をFSS活動が担っていることである。X学園では、5年生から、教科担任制、50分授業、定期テスト、部活動等、中学校的な生活が始まる。そうした生活に慣れる一つの要因として、FSS活動が位置づいている。B先生の語りをみてみよう。

I：5年生は、FSSで6年、7年と関わって、中学生の姿が見えることがあるんですか。

B：見えると思いますね。あとは、先輩達にちょっと話を聞いてもらうこともできるので。そこは、行事のこととか、よく聞いているなってイメージがあります。「去年の何年生は、こういうことをやっていました」みたいな、よく知っているなどか。

I：そういう意味では、5年生が中学校的な生活に慣れさせる一つの役割としても、FSS活動があるんですね。

B：あるかもしれないですね。コミュニケーションをとっているのです。はい。

このように、FSS活動で、6、7年生と交流することで、5年生は中学校的な生活に慣れていっている様子が伺える。

② 5-7年生ブロックの一員としての意識

二つめは、「5-7年生ブロックの一員としての意識」が芽生えることである。

5年生3クラス、6年生3クラス、7年生4クラスの教室は、全てX学園の3階のフロアにある。FSS活動を通して、5年生は、同じフロアにいる6、7年生の動きに注目していくことになる。

I：5年生が中学校的な生活に慣れることの一環として、FSS活動が位置づいているという側面もあるんですか。

A：そうですね、ありますね。なんとなく、大きな流れに乗れるというか。5年生単独で動いているんじゃないという意識になるので。なんとなく、途中から。7年、6年が動いたから、同じフロアですから、7年、6年が動いたから、それじゃ行くかみたいなの。

5年生は、6、7年生の動きを意識して、同じフロアで生活していくようになる。そのことで、5-7年生の「大きな流れ」に乗っていき、5-7年生ブロックの一員としての意識を身につけていくといえよう。

(4) 6年生の変化

FSS活動が始まることで、6年生には、どのような変化がみられるのであろうか。3つの点を挙げておく。

① 上級生としての意識

一つめは、「上級生としての意識」の芽生えである。

I：今年と去年の6年生を見て、FSSにいる6年生は、どんな感じですか。

B：7年生がいるので、それぞれの班の中で、まだリーダーという感じではないですけど。ただ、下に5年生ができたので、去年よりもちょっと5年生の面倒をみないといけないなあとか、ちょっとしっかり良いカッコ

義務教育学校における小中交流に関する一考察

をしないといけないなあっていう雰囲気は、6年生になると感じますね。

これまでも、X学園の子どもたちは、一つ屋根の下で1-9年生と一緒に過ごしてきた。なので、6年生は、5年生以下の児童を下級生として意識することはできた。しかし、FSS活動が始まり、5-7年生で頻繁に交流することで、6年生は、5年生をより意識するようになり、また副班長をする者も出てくるなかで、上級生としての意識が明確になっていくと考えられる。

② 7年生の姿から学ぶ

二つめは、「7年生の姿から学ぶ」ことである。FSS活動を通して、6年生は、7年生の行動を見本としていく。それは例えば、学年集会や5、6年生合同遠足の時に垣間見ることができる。まず、学年集会の場面をみてみよう。

I：6年生の様子もずっと見てきている所があると思うんですけど。FSS活動をやっていて、6年生はどうですか。

A：自分は、すごい（指導が）やりやすいですね、やっぱり。さっきの（5-7年生）ブロックの集会（FSS集会）がありますよね。あの7年生が司会をして、最初に話してというやり方を、5、6年生が、同じことを、学年集会でやるので。〈中略〉6年生の学年集会の時は、6年生の学級委員が司会をして、必ず一人、誰かが話をしてっていう流れができるので。

6年生は、FSS集会での7年生の姿を参考にして、6年生の学年集会を行っていくのである。次に、5、6年生合同遠足の場面をみてみよう。

B：今度9月に、5年生と6年生と一緒に遠足、校外学習に行くんですけど。その時も、今行っているFSSの班で、班ごとに班行動するので、その時

に6年生が班長なるので、ここでちょっと意識は変わりますよね。

I：FSS で見てきた7年生の姿を、今度は自分たちでやってみるみたいな。

B：そうですね。

6年生は、FSS 活動でみた7年生の行動を、5、6年生合同遠足の場面で活かしていているといえる。このように、6年生は、7年生の姿から様々なことを学んでいているといえよう。

③ モチベーションの確保

三つめは、「モチベーションの確保」である。中学校籍の教員であるC先生の話のみてみよう。

C：(X 学園では) どうしても5、6年生で荒れるんですよ。荒れるっていうか、ちょっとこう…。で、いろいろ小学校の先生から聞いてみたら、5年生、6年生の先生は苦しんでいて。何を苦しんでいるのかというと、結局小中一貫だから。普通は、小学校6年生は、(小学生の) 最後だからっていうことで、花を持たせてもらえるじゃないですか。最後の組み体操であるとか、表現活動であるとかってふうに、花を持たせる所を〈中略〉。(5、6年の問題の原因が) 何でかって話を聞くと、さっき言ったように、こう花を持たせられないから、モチベーションをどこに持っていいかわからないみたいな、そういう話は、よく聞いていました。「だって、どうせオレら、来年もここにいるだろ」みたいな。

FSS 活動が行われることで、6年生は、上級生としての意識が生まれ、7年生を見本とするようになる。それは、6年生にとって、5年生の先輩としての役割が明確になることでもある。また、来年は7年生として、5-7年生ブロック

を引っ張っていくという展望が明確になることでもある。その結果、6年生は、自分の立ち位置が明確になり、6年生としての役割をしっかりとやっていこうというモチベーションが向上するのである。

(5) 7年生の変化

FSS活動が始まることで、7年生には、どのような変化がみられるのであろうか。3つの点を挙げておく。

① リーダーとしての意識

一つめは、「リーダーとしての意識」である。B先生の話のみてみよう。

I：(担任をしていた5年生が7年生になるまで)3年間通して、見ている感じになりますよね。子どもたちは、どうですか。

B：そうですね。全然違いますね、FSSで。5年生までは、本当についてくだけで、6年の時も、そこまでリーダーっていう意識もなくやっていたが。急に、7年生になって、みんなを並ばせなきゃいけないかったりとか、注意をしなきゃいけないかったりだとかというの。7年生になって、すごくやっぱり出てきたなあって思いました。

I：リーダー性が身についた？。

B：そうですね。そういう環境があるので。

同様のことは、C先生の話からも伺える。

I：FSSをはじめて、子どもたちは変わりましたか？。

C：変わりましたね。

I：(FSSの)スタートが7年生(の担任)の時ですもんね。どんな風に変

りました。

C：まず、僕は7年生を見ているんですけど、7年生がリーダーシップをとろうという気持ちになっているのは、すごく大きいですね。最初は、やらされている感があるんですね。(縦割り班の)名簿を組んで、名簿を組んだ中で、年度当初なんで分からないんですけど、「(班長を)やってみて」、「やってみて」、「やってみて」って各班ごとのリーダーを決めてやるんですけど。(決めた後は)まあお兄ちゃんの顔をしてやるんですよ。「こうだよー!」とか(5,6年生に言って)。初めてやったときに、僕が特に感じたのは、長縄交流の時なんですけど。2学期末か3学期初めにやったんですけど。こう、あんなヤンチャな7年生が、5,6年生の背中をこうやって、(飛ぶタイミングの時に)「今だよ」、「今」、「今」って押すんですよ。

このように、FSS活動の中で、7年生が急にお兄ちゃんお姉ちゃんになり、リーダーシップを発揮していることがわかる。なお、その背景には、教員が、7年生に声かけをしている点も重要である。C先生の話のみてみよう。

C：例えば僕は(FSS)集会の前に(7年生に)言うんですけど。「お前達がしっかり並んで、シーンとする空気を作れたら、この集会はちゃんと静かになるよ」って。絶対見てるからね、先輩のことをって。7年生ぐらいになってくると言っていることも、ある程度分かってくるし、「よしカッコイ先輩になろう」じゃないけど。ていう風な、身近な後輩を意識するようになるというのが、すごく大きいのかなって。

上記のような、担任の教員の声かけも、7年生のリーダーシップの育成につながっているといえよう。

② 中1ギャップの解消

二つめは、「中1ギャップの解消」である。まず、A先生の話のみてみよう。

A：ここ2、3年は、7年生がわりと安定しているんですけど。それは、やっぱり6年が7年のリーダを見ているから。6年のうちにリーダーを育てているから。7年になったら、「はいコイツがリーダーね」ということで、クラス分けをしちゃうので。必ずクラスに経験しているリーダーが、ばーっと分かれるから、(7年生の)4月5月が安定して。他の学校だと、中1ギャップが絶対ありますけど、X学園の場合は中1ギャップがないというか、少ないですね。

7年生の姿を見続けてきた6年生が、7年生になったとき、彼らは、7年生の学校生活はよく知っているし、リーダーシップをすぐに発揮しやすい。そのことで、クラスが安定し、中1ギャップの解消につながっているといえよう。

③ 下克上と切磋琢磨

3つめは、「下克上と切磋琢磨」である。5-7年生で行われるFSS活動は、年齢が近い子どもたちの交流である。成長に個人差があるなかで、7年生より背が高い6年生がいたり、7年生よりもコミュニケーション能力のある5年生がいたりするかも知れない。そうした中で行われる活動は、どのようになるのだろうか。まず、A先生の話のみてみよう。

I：あと、年齢が近い集まりなので、下克上みたいなこと。7年生がリーダーをやっているけど、ちょっと頼りなくて、5、6年生の声が大きくなっちゃうみたいなことってあるんですか。

A：ありますね。5、6年生が生意気だったりすると、気弱な優しい7年生だ

と、(下克上に) あっちゃいますね。けど、誰かが、部活みたいな関係性ですねって言うてましたね。でも、部活ほど厳しくなくて。なんで、まあ多少下克上があっても良いんじゃないかと(笑)。そこで学んでいくんじゃないかと。

C先生も同様のことを話してくれた。

I : (FSS 活動では) 漢字コンテスト, 計算コンテストといった活動もありますが。そうした所で, 下克上みたいなことは起こるんですか。

C : 7年生も負けられないから, ちょっと頑張っている所はあるかも知れないって話は聞きましたけどね。

I : 切磋琢磨ですね。

C : その通りですね。

I : これまで (FSS 活動を) 4年間やってきて, 班が崩壊した所は無いんですか。

C : 無いですね。

FSS 活動は, 年齢が近い者同士で活動するので, 上級生よりも下級生の方が優れてしまう時もある。なので, FSS 活動は, 不安定な部分や緊迫する部分を含んでいる活動であるといえる。一時的に落ち込む7年生もいるかも知れない。しかし, それはお互いに刺激し合い, 切磋琢磨し, 大きく成長する契機でもある。自分の可能性に気づく7年生もいるかも知れない。このように, FSS 活動は, 両義的な要素を含んでいるといえる。今のところ, 班が崩壊してしまうような下克上は起こっていない。そうした点で, FSS 活動は, 切磋琢磨している側面が強い状況にあるといえる。なお, この点が, 年齢がかけ離れた, 1年生と中学生による交流(お世話活動)と大きく異なる点である。

(6) 教員の変化

FSS 活動を通して、子どもたちは様々な変化をとげている。と同時に、教員も変化していくことになる。3つの側面からみていくことにする。

① 同じ方向を向く

一つめは、5-7年生ブロックの教員全体が「同じ方向を向く」ことである。小学校籍の教員である B 先生の話を見てみよう。

I : (B 先生が) 昔1, 2年生の担任をやっていた時は、クラス担任制で、基本、クラスの子を中心にみてきたと思うんですけど。FSS 活動が始まって、5-7年生の先生で、5-7年生の子どもたちをみるっていうのは、戸惑いとかはあるんですか。

B : 最初はありました。そういう意識はあまりなくて。学級王国を作るみたいな、一人の先生が自分のクラスを作りあげていくというのが、小学校のベーシックな感じだったので。中学校の先生は、もちろん担任の先生は、クラスもみますけど、学年の先生が学年の子どもたちを見るという意識がすごく強いので。

5-7年生ブロックの子どもたちを指導することに関して、教科担任制に慣れている中学校籍の教員は、比較的に行いやすい面がある。しかし、クラス担任制に慣れている小学校籍の教員は、そうした指導に戸惑うことがある。しかし、FSS 活動を通して、小学校籍の教員も、5-7年生ブロックの教員全体で、子どもたちを指導するという意識を身につけていく。小学校籍の A 先生は、そうした状況を的確に述べている。

A：(FSS活動が始まって)先生達が、みんな同じ方向を向くようになったっていうのが、一番大きいのかなって。小だから中だからっていうのが、無くなってきたのが、それが大きいですね。

FSS活動を通して、小学校籍の教員と中学校籍の教員の相互理解が深まることで、指導方針が一つにまとまっていったといえよう。

② みんなで注意

二つめは、「みんなで注意」である。「同じ方向を向く」ことによって、5-7年生ブロックの教員全体が、しっかり注意できるようになっていく。

A：(5-7年生は)フロアも一緒なので、(教員)みんなで注意できるし。割とFSSがなかったときには、一緒のフロアなんだけど、やっぱり(自分の)学年だけっていうか、(他の学年の子どもたちには)言いづらいっていうか。「言って良いですよ。みんなで注意しましょう」って言う割には、そんなにやらなくて、形だけだったんで。でも、今は、みんな歩きながら、「やめろ」って感じで(注意して)。

I：やっぱり、(FSSは)上手い活動なんですね。

A：子どもたちも、それが分かっているんで。(FSSが)ないときには、(違う学年の先生に注意されると)「誰だ?」ってなるんだけど、(FSSが)これがあると、(違う学年の先生が注意しても)「あー」ってなるんで。「注意をされるんだな」って。

FSS活動が始まる前は、例えば7年生の教員が、5年生の子どもの注意することは、難しい側面があった。しかし、FSS活動が始まることによって、教員と異学年の子どもとの交流が深まり、教員が異学年の子どもの注意をしやすく

なったといえよう。また、子どもたちも、異学年の教員の存在を認識するようになり、異学年の教員に注意されてもピンとくる状況になったといえる。

③ フロアの同居人の意識

3つめは、「フロアの同居人の意識」である。C先生の話のみてみよう。

C：(5, 6年生は) いろいろな教員に見られているよってというのが分かるのかも知れないですね。嫌でも中学校の先生との関わりが出てくるじゃないですか。だから、こっちも「あ、オマエ、FSSでいたヤツで、なに廊下走ってるんだよ」とかって(5, 6年生に) 言いやすいし、こっちもフロアの中で、同じ生活している同じ仲間というか、同居人として、教員も意識が生まれるのは、ふといま感じましたけど。

FSS活動を通して、5-7年生の交流が深まり、また5-7年の教員の交流も深まる。さらに、異学年の子どもと教員の交流も深まる。そのことによって、子どもも教員も、同じフロアで学校生活を過ごす者同士の意識が芽生えることになる。

3. まとめと今後の課題

(1) 調査のまとめ

調査結果をまとめると以下ようになる。第1に、FSS活動は、気の合う教員で話が盛り上がり、その勢いで作りあげていった。X学園らしさである交流に着目し、5, 6年生に見通しをもたせることが当初の目標であった。第2に、5年生は、FSS活動を通して、中学校的な生活に慣れていったり、5-7年生ブロックの一員としての意識を芽生えさせたりしている。第3に、6年生は、FSS

活動を通して、上級生としての意識を身につけ、7年生を見本とし、6年生の役割をしっかりと担っていくようになっていく。第4に、7年生は、FSS活動を通して、リーダーとして活躍し、中1ギャップをあまり感じることなく、5、6年生と切磋琢磨していった。第5に、5-7年生ブロックの教員は、同じ方向を向いて指導をするようになり、みんな異なる学年の子どもを注意し、フロアの同居人としての意識が生まれていった。

(2) 考察と今後の課題

一般的な小学校と中学校に通う子どもたちのことを考えてみる。小学5年生、6年生は、最上級生となり、しっかりしてくる。中学1年生になると、一番下の学年になるので、相対的に幼くなる。しかし、X学園の5、6、7年生のことを考えてみると、5-7年生ブロックの中では、5、6年生は、相対的に幼くなり、7年生がリーダーとして、しっかりする。換言すれば、一般的な小中学校では、5、6年生がしっかりし、中1は幼くなるのに対して、X学園では、5、6年生は幼くなり、7年生はしっかりする。つまり、X学園の子どもたちは、一般的な小中学生とは異なる成長のプロセスをたどることになる。こうした成長のプロセスは、その後、どのような影響を及ぼすのであろうか。X学園の8、9年生の状況にも注目していきたい。

なお、紙幅の都合により、十分に分析できなかった部分がある。それらは、以下の通りである。第1に、X学園では、7年生の時に1クラス分とプラス α の新入生が合流する。そうした新入生を定着させる役割も、FSS活動は担っている部分がある。第2に、前期は、班のメンバーが仲良くなるための活動を多くし、後期は、班同士で競い合う活動を多くする等、FSS活動の年間計画を工夫している。第3に、FSS活動の時間を確保するために、主に水曜日の昼休みの時程を見直した。第4に、FSS活動に関する打ち合わせを効率化させる努力をしている。以上の点は、今後の課題とする。

義務教育学校における小中交流に関する一考察

気の合う教員仲間が語り合い、FSS活動を立ち上げた。半信半疑のまま始まったFSS活動であるが、想像以上に大きな実りを、5-7年生にもたらしているといえる。また、小中が接続する5-7年生ブロックが安定し、充実することで、X学園全体にも、大きな実りをもたらしているといえる。これからFSS活動が、どのように進化していくのか見続けていきたい。

注

- (1) 石井久雄「教員からみた小学生と中学生の関係性の特徴～小中一貫校における『お世話活動』を事例にして～」『明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育』第5号, 2009年, 125-143頁。石井久雄「小中一貫校における中学生から小学生への『お世話活動』の意義に関する一考察～小中交流がもたらす影響に注目して～」『日本特別活動学会紀要』第19号, 2011年, 23-31頁等。
- (2) X学園のある地域では、学校選択制が実施されている。

〈謝辞〉

インタビュー調査に協力してくれたA先生, B先生, C先生。インタビュー調査実施に向けてサポートしていただいた校長先生, 副校長先生に, 記して感謝申し上げます。